

〈論文〉

シェリーとその周辺——Ⅲ

加藤 芳子

(4) Erasmus Darwin (1731-1802)

1. シェリーとイラズマス・ダーウィン

英国18-19世紀のロマン派詩人パーシー・ビッシュ・シェリー Percy Bysshe Shelley (1792-1822) は、イートン校 Eton College 時代にジェイムズ・リンド博士 Dr. James Lind (1736-1812) に科学を教わり、ウィンザー Windsor にあった博士の屋敷に呼ばれ、相当可愛がられたらしい事は、既に述べた事がある(加藤, I, 89)。リンド博士が親友の科学者達の話をする時、シェリーは夢中になって聞いていたようである。リンド博士は、当時ヨーロッパでトップ・レベルにあったエディンバラ大学で医学を学び、後に医学博士号を取り、ウィンザーに住んでいた頃には、英国王室の侍医の立場にあり、英国王立協会 Royal Society の特別会員 Fellow であった。王立協会の仲間には、そうそうたる人物が名をつらね(加藤, I, II)、中にはリンド博士のいとこのジェイムズ・ケアー James Keir (1735-1830) がいた。このいとこは、英国の産業革命の原動力となったルナー協会 Lunar Society のメンバー達と親交があり、その中に、本論で紹介するイラズマス・ダーウィン Erasmus Darwin (1731-1802) がいた(加藤, I, 85-88)。

2. 生まれと教育

イラズマス・ダーウィン [以下ダーウィン] は、『種の起源』(1859年)を書いたチャールズ・ロバート・ダーウィン Charles Robert Darwin (1809-1882) の祖父で、英国の博物学者・医者・詩人である。

以下、英国人名辞典 D.N.B. やオックスフォード人名辞典、そして孫のチャールズ・ダーウィンが書いた祖父の『イラズマス・ダーウィンの伝記』、King-Hele の著作、笠原順路の復刻版への解説などを参考に、ダーウィンの生涯と、その科学と文学における功績について、まとめてみる。

ダーウィンの先祖は英国リンカーン州 Lincolnshire 出身の名家で、古くは 17 世紀の国王ジェイムズ 1 世やチャールズ 1 世にも仕えた小地主 yeoman であった。イラズマス・ダーウィンの父はロバート・ダーウィン Robert Darwin (1682-1754) で、弁護士であったが、若くして引退していた。母は旧姓をエリザベス・ヒル Elizabeth Hill (1702-1797) といい、子供は 4 人兄弟と 3 人姉妹の計 7 人で、イラズマスは末っ子であった。こうしてダーウィンは 1731 年 12 月 12 日、英国中部にあるノッティンガム州 Nottinghamshire の州都ノッティンガム Nottingham 近郊のエルストン・ホール Elston Hall で生まれている。

教育はまず、1741 年からチェスターフィールド・スクール Chesterfield School で、次に 1750 年からはケンブリッジ大学のセント・ジョンズ・コレッジ St. John's College, Cambridge で受け、大学では主に古典と数学を学ぶ。学生時代にはエクセター奨学金をもらい、1751 年に書いたフレデリック皇太子の追悼の詩は、*European Magazine* (1795) に掲載されている。

ケンブリッジ大学に在籍中でも、彼はロンドンに通い、外科医ウィリアム・ハンター William Hunter の講義に出席している。1753 年から 1756 年まで彼は、当時ヨーロッパでも最高のレベルにあったエディンバラ大学で医学を学び、1755 年にはケンブリッジ大学から医学士号 M.B. を取得している。彼がケンブリッジ大学で文学士号 B.A. や医学博士号 M.D. を取得したという形跡は、本人及び孫のチャールズ・ダーウィンの主張にもかかわらず、残っていないそうである。

3. 青年期

イラズマス・ダーウィンはまず 1756 年 9 月に、ノッティンガムで医師として開業するが、患者が全く来ないので、経営が成り立たず、1756 年 11 月には、当時の新興工業都市バーミンガム Birmingham 近郊のリッチフィールド Lichfield に引っ越し、以後当地には 25 年間住む事になる。仕事は順調となり、貧しい患者からは診療報酬を請求することをせず、逆に食料や毛布などを提供したりする名医であった。1757 年には当地の事務弁護士チャールズ・ハワード Charles Howard と妻ペネロピー Penelope の娘、メアリー・ハワ

ード Mary Howard (1740-1770) と結婚する。子供は息子が3人生き残るが、長男のチャールズ Charles は、医学生の際に解剖中に、伝染病に感染して命を落とす。次男のイラズマス Erasmus は弁護士になる。3男のロバート・ウェアリング Robert Waring は1766年に生まれ、外科医として成功し、かのチャールズ・ダーウインの父親となる。

1770年代初めにダーウインは、メアリー・パーカー Mary Parker なる女性との間に2人の非嫡出子をもうけてしまう。が、1775年にはエリザベス・ポール Elizabeth Pole という夫人と知り合いになり、その夫が亡くなると、1781年にこの未亡人と再婚する。彼女の父は、ポートモア Portmore 伯爵チャールズ・コリアー Charles Colyear であった。

4. 科学と詩作

ダーウイン夫妻は新居を、ダービー Derby から数マイル離れた所にあるラドバーン・ホール Radburn Hall に定めるが、1783年にはダービーに引っ越し、1802年には更に、ダービーの北にあるブレズオール・プライオリー Breadsall Priory に移る。子供は6人生き残った。

医師としての仕事のかたわらダーウインは、博物学の研究と、機械の発明や改良などにいそしむことになる。「英国王立協会」の機関誌『哲学会報』*Philosophical Transactions* には、彼の論文が、1757年、1760年に、計6本も掲載されていく。1本目の論文の要旨は、電気というものは、空気の機械的特性に悪い影響を及ぼす事はないというもので、2本目の論文は、吐血している患者の治療に関するものである。他に、酸素や雲や光合成に関するものなどもある。1761年に彼は、英国王立協会の特別会員 Fellow となる。

1760年代から1770年代の初めにかけてダーウインは、様々な分野で研究をしている。その興味は、ガス、化学、馬車、スピーキング・マシン（発話機）、地質学、蒸気機関、病症、気象学、紡績機、水力ポンプ、運河の水位調節用ロック、コピー機械、機械の鳥など、多岐にわたっている。

1770年代後半になると、ダーウインの関心は、植物学の理論と実践に集中するようになる。彼はリッチフィールドの郊外に、自分の「植物園」を造る。その辺の事情を、孫のチャールズ・ダーウインは、その著『イラズマス・ダーウイン伝』の中で、次の様に述べている (C. Darwin, 31)。

In 1778 he purchased the lease of a pretty valley, about eight acres in extent, near Lichfield, and made it into a botanic garden; and this seems to have been

his chief amusement. Miss Seward describes the place in her grandiose style as “a wild umbrageous valley...irriguous from various springs, and swampy from their plenitude”. It now forms part of an adjoining park; and a Handbook for Lichfield says it is still “a wild spot, but very picturesque; many of the old trees remaining, and occasionally a few Darwinian snow-drops and daffodils peeping through the turf, and bravely fighting the battle of life.”

この植物園を造りながらダーウィンは、リッチフィールドの植物学会とその会員に手伝ってもらって、かのスウェーデンの博物学者カール・リンネエウス Carl Linnaeus [いわゆるリンネ] (1707-1778) の著作の翻訳に着手し、『植物の体系』(1783年)及び『植物の家族』(1787年)として出版している。前者は、王立協会の会長ジョーゼフ・バンクス Joseph Banks (1743-1820) に献呈されている。バンクスは、かのクック船長 Captain James Cook (1728-1779) の探検に同行して、オーストラリアなどに行き、様々な植物を採集して英国に持ち帰り、英国の植物学の発展に多大な貢献をした植物学者である。彼はまた、シェリーが教わったリンド博士に同行して、アイスランドの火山と氷河を研究にも行っている。バンクスが王立協会の会長を長期間つとめていた頃、ルナー協会も活発に活動しており、協会の主だったメンバーはほとんど全員、王立協会の特別会員 Fellow になっている。彼らが、英国の産業革命の原動力になっていたのである(加藤, I)。

ダーウィンは、自分の植物園を耕しながら、リンネの著作を翻訳しているうちに、リンネの植物の分類法というものを、友人の詩人のアンナ・シウォード Anna Seward の勧めもあって、彼なりの詩の形に表現し、一般の人々に広めようと思いつく。しかし、当時の常識では、医者である自分が詩を出版したということが知れば、自分の名誉にも傷が付くと思った彼は、1789年まで、この「植物の愛」なる詩の出版を引き延ばすのである。

この長編の詩は4編からなり、英雄2行連句 heroic couplet で書かれている。語り手は植物の女神“Botanic Muse”で、83種類もの植物が、まるで人間の男と女のように愛を交わし、その中には詩とは何ぞやという文学論も散在する。膨大な量の注は、ダーウィンがいかに博物学に精通しているかを如実に物語っている。この詩はまた、後にチャールズ・ダーウィンがその著『種の起源』の中で述べることになる、いわゆる「進化論」のもととなると言われている、「自然界の進化」という概念を、イラズマス・ダーウィンが初めて提議しているという点で、注目に値するものでもある。その一節を引用すると、以下のようなになる。

Perhaps all the products of nature are in their progress to greater perfection? an idea countenanced by the modern discoveries and deductions concerning the progressive formation of the solid parts of the terraqueous globe.

自然界の全ての産物は、もっと偉大な完成に向かって、進歩の過程にあるのではないのだろうか？これは、水陸からなるこの地球の固体の部分の発達の形成に関する、近代の諸発見や推論によって、支持されてきている考えである。

加藤芳子 訳

「植物の愛」の詩の中でダーウィンは、植物のたたずまいや、雄しべと雌しべの受粉の様子を、擬人化という手法によって、人間の男性と女性の求愛という現象になぞらえ、植物の形状や色彩を、絵画的な描写によって、鮮明に表現していく。一例として、カンナの花の描写の例を紹介してみよう。

“First the tall CANNA lifts his curled brow
Erect to heaven, and plights his nuptial vow;
The virtuous pair, in milder regions born,
Dread the rude blast of Autumn’s icy morn,
Round the chill fair he folds his crimson vest,
And clasps the timorous beauty to his breast.

11. 39-44

「まず背の高いカンナは、弧を描く眉を
天に垂直にあげ、彼の結婚の誓約を、誓う。
この貞淑な夫婦は、英国より温暖な国に生まれたので
秋の凍てつく朝の、荒々しい突風を怖がっている。
凍えている美人の周りに、彼は深紅のコートを巻くと
臆病な美人を、胸に抱きしめている。

加藤芳子 訳

ダーウィンによれば、カンナの赤い花は、夫が妻を、異国の北国の寒さから優しく守る、深紅のコートなのである。

この詩に登場する多数の花々の、雄しべと雌しべの数は、必ずしも一対一とは限らず、一夫多妻あり、その逆もあり、スワッピングあり、兄弟姉妹や親子などが入り乱れる、近親相姦もありと、ありとあらゆるカップルの組み合わせが登場し、読者は、自然界の愛の自由と勢いと多様性とに、圧倒されるばかりである。

ダーウィンは、先に出版した「植物の愛」(第2部)のリプリントと、後で出版された「植物の秩序」(第1部)を合わせて、『植物園』*Botanic Garden* として1791年に出版する。彼の基本的な姿勢は、この詩の広告の中の、次のような彼の言葉に表れている。

The general design of the following sheets is to enlist [enlist] Imagination under the banner of Science; and to lead her votaries from the looser analogies, which dress out the imagery of poetry, to the stricter ones which form the ratiocination of philosophy.

以下の詩のおおよその構想は、想像力を科学の旗の元に入れること、そして詩の比喩的な描写を飾り立てるもっと自由な類推から、哲学という推論を形成するもっと厳格な類推へと、想像力の信奉者を導くことである。

加藤芳子 訳

「植物の秩序」の詩の方は、四編からなる、長編の教訓的な詩で、各編が、地、水、風、火という四大元素の、一つ一つに対応している。この詩にも、博物学の理論と実験に関する膨大な注が付いている。

「植物の秩序」の中でダーウィンは、同時代の博物学者や産業経営者達の功績を讃えている。その中には、かの陶芸家のジョサイア・ウェッジウッド Josiah Wedgwood, 天文学者のウィリアム・ハーシェル William Herschel, ヘンリー・キャヴェンディッシュ Henry Cavendish, 科学者・発明家のベンジャミン・フランクリン Benjamin Franklin, 酸素を発見しソーダを発明した化学者のジョーゼフ・プリーストリー Joseph Priestly, 蒸気機関を改良したジェームズ・ワット James Watt, マシュー・ボルトン Matthew Boulton, ジェームズ・ブリンドリー James Brindley, トーマス・セイヴァリー Thomas Savery, ジョン・ホワイトハースト John Whitehurst などがいる。

産業革命の代表的な機械類の製作過程や操作方法、機能、効力などの生々しい描写が一方にあり、他方、自然界に関する詩的な描写が、ニンフや地の精、空気の精、火トカゲな

どと共に登場する。自然と産業の不思議な融合の世界である。しかも全ては、成熟に向かう進歩の過程にあるのである。

5. ルナー協会

ルナー協会については、既に拙論「シェリーとその周辺——Ⅰ」において説明してある。英国のバーミンガムを中心に、毎月一度、満月近くの月曜日の午後に、会員の家で会合を開いたと言われるが、私的な会合なので、ちゃんとした記録が残っているわけではない。

ダーウィンは、リッチフィールド植物学会、ルナー協会、ダービー哲学学会の、三つの学会を創設しているが、このルナー協会が一番重要である。その会員には、ボルトンやトマス・デイ Thomas Day, リチャード・ラヴェル・エッジワース Richard Lovell Edgeworth, サミュエル・ゴルトン・ジュニア Samuel Galton Jr., ロバート・オーガスタス・ジョンソン Robert Augustus Johnson, ジェイムズ・ケアー James Keir, プリーストリー, ウィリアム・スモール William Small, ジョナサン・ストークス Jonathan Stokes, ワット, ウェッジウッド, ホワイトハースト, ウィリアム・ウィザリング William Withering などがいる。

彼らは革新的な思想を持ち、科学技術や産業や学問の発達を信じ、社会改革をも目指していた。彼らは集まっては食事を共にし、新しい科学的発見や、理論の実験と証明、技術革新と改良・工夫などについて、活発に議論をかわし、時には論争になることもあった。彼らの活動のおかげで英国の産業革命は、躍進していくことができたのである。その指導的な立場にあったのが、イラズマス・ダーウィンだったのである。

長期間にわたる研究と実験、発明、改良という人生の果てに、彼は、心臓病の発作のため、苦痛もなく、突然に、1802年4月18日に、ブレズノール・プライオリーで亡くなる。

1796年に当時23才のロマン派の詩人サミュエル・テイラー・コウルリッジ Samuel Taylor Coleridge (1772-1834) は、ダーウィンについて以下のように評している。

ダービーという町は、好奇心を駆り立てるものに満ちています。綿・絹工場、画家のライト、それからキリスト教以外のことには何にでも手を出すダーウィン博士！恐らくダーウィン博士はヨーロッパの他のいかなる人よりも幅広い知識をもっていて、学者のなかでは最も創意工夫に富む人でしょう。

(笠原, 9)

彼の科学者および詩人としての功績の中で、シェリーに影響を与えたと思われるものは、いろいろ考えられる。これらについての具体的な考察は、紙面の都合上、別の機会に論じることとする。

参考文献

テキスト

The Poetical Works of Erasmus Darwin, M.D.F.R.S., containing The Botanic Garden, in Two Parts; and The Temple of Nature. London: J. Johnson, 1806. 解説 笠原 順路.

翻訳

荒俣 宏 編・訳『英国ロマン派幻想集』, 東京: 国書刊行会, 1984。

[この翻訳には、原文の英語のテキストの誤植のせいか、ところどころに誤訳が見受けられるので、注意を要する。]

イラズマス・ダーウィン著, 加藤芳子訳. 「植物の愛」(1), 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』, 第63号, 2005年, pp. 1-14 及び「植物の愛」(2), 同 pp. 15-32.

辞典・伝記及び研究書

_____. D.N.B. London, 1893.

_____. Oxford D.N.B., 2004.

加藤 芳子. 「シェリーとその周辺 —— I」, 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』, 第61号, 2004年, pp. 85-94.

_____. 「シェリーとその周辺 —— II」, 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』, 第61号, 2004年, pp. 95-102.

King-Hele, Desmond G. (ed.). Charles Darwin's The Life of Erasmus Darwin. Cambridge Univ. Press, 2003.

_____. 'Shelley and Dr. Lind,' Keats-Shelley Memorial Bulletin, No. XVIII, 1967, pp. 1-6.

_____. 'The Lunar Society of Birmingham,' Nature, Macmillan, 1966.

Schofield, R. E. The Lunar Society of Birmingham, O.U.P., 1963.

辻 篤子. 「エラズマス・ダーウィンと進化論 (上)」, 『桃山学院大学生物学史研究』, 第32号, 1977年, pp. 15-22.

_____. 「エラズマス・ダーウィンと進化論 (下)」, 『桃山学院大学生物学史研究』, 第33号, 1977年, pp. 8-21.